高等讀本

山縣悌三郎 編纂

3759
Ya13
資料室

KODAK Color Control Patches © The Tiffen Company, 2000
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
Kodak LICENSED PRODUCT
Centimetres Inches

30239
教科書文庫
3
810
32-1894
20000
14537

資料室
文學
書之保
375.9
Ya13

山縣悌三郎編纂

高等讀本

文學社

明治二十七年四月十日
文部省再檢定濟學校教科用書

廣島大學
教
14537
圖書

第十七課 金ヲ借ルコトノ危キ事 中村正直 三十二
第十八課 世界周遊 其三 三十四
第十九課 馬盜人 三十六
第二十課 自暴自棄 伊勢貞丈 三十九
第廿一課 世界周遊 其四 四十
第廿二課 珊瑚の話 其一 四十一
第廿三課 珊瑚の話 其二 四十五
第廿四課 世界周遊 其五 三十八
第廿五課 鐵ノ種類 五十一

第廿六課　觀世太夫の傳　畑　鶴山　五十三
第廿七課　世界周遊　其六　五十四
第廿八課　忍耐　五十六
第廿九課　應擧が臥猪　并野馬の話　瀧澤馬琴　五十七
第三十課　締盟國　五十九

帝國圖書館藏

高等讀本卷之四

第一課　軍人への勅諭　其一

我が國の軍隊は、世、天皇の統率〜給ふ所にぞある。昔神武天皇躬から大伴、物部の兵どもを率ゐ、中國のまつろはぬものどもを討ち平げ給ひ、高御座に即かせられて、天下〜ろ〜め〜給ひ〜より、二千五百有餘年を經ぬ。此間世の樣の移り換るに隨ひて、兵制の沿革も亦屢、なりき、古は天皇躬から軍隊を率ゐ給ふ御制にて、時ありては、

皇后皇太子の代らせ給ふこともありつれど、大凡そ兵權を臣下に委ね給ふことはなかりき。中世に至りて、文武の制度、皆唐國風に倣はせ給ひ、六衞府を置き、左右馬寮を建て、防人など設けられ〜かば、兵制は整ひたれども、打續ける昇平に狃れて、朝廷の政務も漸く文弱に流れければ、兵農れのづから二つに分れ、古の徵兵は、いつとなく壯兵の姿に變り、遂に武士となり、兵馬の權は、一向に其武士どもの棟梁たる者に歸し、世の亂と共に、政治の大權も、亦其手に落ち、凡そ七百年

の間、武家の政治となりぬ。世の樣の移り換りて、斯くなれるは、人力もて挽回すべきにあらずとはいひながら、且は我が國體に戾り、且は我が祖宗の御制に背き奉り、淺間〜き次第なりき。降りて弘化、嘉永の頃より、德川の幕府其政衰へ、剩へ外國の事ども起りて、其侮をも受けぬべき勢に迫りければ、朕が皇祖仁孝天皇、皇考孝明天皇い、たく宸襟を惱ま〜給ひしこと、忝くも又惶けれ。然るに、朕幼く〜て天津日嗣を受け〜、初め征夷大將軍其政權を返上し、大名小名其版籍を奉還

し年を經ずして海内一統の世となり、古の制度に復しぬ。是れ文武の忠臣良弼ありて、朕を輔翼せる功績なり。歴世祖宗の專ら蒼生を憐み給ひし、御遺澤なりといへども併〳〵我が臣民の其心に順逆の理を辨へ、大義の重きを知れるが故にこそあれ。されば此時に於て兵制を更め、我が國の光を耀かさんと思ひ、此十五年が程に陸海軍の制をば、今の樣に建て定めぬ。夫れ兵馬の大權は、朕が統ぶる所なれば、其司々をこそ臣下には任ずるなれ。其大綱は、朕親ら之を攬り、肯て臣下に委ぬべきものにあらず。子々孫々に至るまで、篤く斯旨を傳へ、天子は文武の大權を掌握するの義を存〳〵て、再び中世以降の如き失體なからんことを望むなり。

一朕は、汝等軍人の大元帥なるぞ。されば朕は汝等を股肱と頼み、汝等は朕を頭首と仰ぎてぞ、其親は特に深かるべき。朕が國家を保護して、上天の惠に應じ、祖宗の恩に報いまゐらすることを得るも得ざるも、汝等軍人が其職を盡すと盡さゞるとに由るぞかし。我が國の稜威振はざるこ

とあらば、汝等能く朕と其憂を共にせよ。我が武維れ揚がりて其榮を耀かさば、朕汝等と其譽を偕にすべし」「汝等皆其職を守り、朕と一心になりて、力を國家の保護に盡さば、我が國の蒼生は、永く太平の福を受け、我が國の威烈は、大に世界の光華ともなりぬべし。朕斯くも深く汝等軍人に望むなれば、猶訓諭すべき事こそあれ。いでや之を左に述べむ。」

第二課　軍人への勅諭　其二

「軍人は、忠節を盡すを本分とすべし。凡そ生を我が國に稟くるもの、誰かは國に報ゆるの心なかるべき。況して軍人たらん者は、此心の固からでは、物の用に立ち得べしとも思はれず。軍人にして報國の心堅固ならざるは、如何程技藝に熟し、學術に長ずるも、猶偶人にひとしかるべし。其隊伍も整ひ、節制も正しくとも、忠節を存せざる軍隊は、事に臨みて烏合の衆に同じかるべし」抑國家を保護し、國權を維持するは、兵力に在れば、兵力の消長は、是れ國運の盛衰なることを辨

へ、世論に惑はず、政治に拘はらず、只一途に己が本分の忠節を守り、義は山嶽よりも重く、死は鴻毛よりも輕しと覺悟せよ。其操を破りて、不覺を取り、汚名を受くるなかれ。

「軍人は禮義を正しくすべし。凡そ軍人には、上元帥より、下一卒に至るまで、其間に官職の階級ありて、統屬するのみならず、同列同級とても、停年に、新舊あれば、新任の者は、舊任のものに服從すべきものぞ。下級のものは、上官の命を承くること、實は直に朕が命を承くる義なりと心得よ。己が隷屬する所にあらずとも、上級の者は勿論、停年の己より舊きものに對しては、總て敬禮を盡すべし。又上級の者は、下級のものに向ひ、聊かも輕侮驕傲の振舞あるべからず。公務の爲に威嚴を主とする時は格別なれども、其外は務めて懇に取扱ひ、慈愛を專一と心掛け、上下一致して、王事に勤勞せよ。若し軍人たるものにして、禮儀を紊り、上を敬はず、下を惠まずして、一致の和諧を失ひたらんには、啻に軍隊の蠹毒たるのみかは、國家の爲にもゆるし難き罪人なるべし。

一軍人は武勇を尚ぶべし。夫れ武勇は我が國にては古よりいとも貴べる所なれば我が國の臣民たらんもの武勇なくては叶ふまじ。況んや軍人は戰に臨み敵にあたるの職なれば片時も武勇を忘れてよかるべきか。さはあれ武勇には大勇あり小勇ありて同じからず。血氣にはやり、粗暴の振舞などせんは武勇とは謂ひ難し。軍人たらんものは常に能く義理を辨へ能く膽力を練り思慮を殫して事を謀るべし。小敵たりとも侮らず大敵たりとも懼れず己が武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれ。されば此勇を尚ぶものは常々人に接るには溫和を第一とし諸人の愛敬を得むと心掛けよ。由なき勇を好みて猛威を振ひたらば果ては世人も忌み嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ。心すべきことにこそ。

第三課　軍人への勅諭　其三

一軍人は信義を重んずべし。凡そ信義を守ること常の道みはあれど、わきて軍人は信義なくては一日も隊伍の中に交りてあらんこと難か

るべし。信とは己が言を踐み行ひ義とは己が分を盡すをいふなり。されば信義を盡さむと思はゞ始より其事の成し得べきか得べからざるかを審に思考すべゝ。朧氣なる事を假初み諾ひて、よしなき關係を結び、後に至りて信義を立てんとすれば、進退谷まりて、身の措き所み苦むことあり。悔ゆとも其詮なし。初めに能々事の順逆を辨へ、理非を考へ、其言は所詮踐むべからずと知り、其義はとても守るべからずと悟りなば、速に止むるこそよけれ。古より或は小節の信義を立てんとて、大綱の順逆を誤り、或は公道の理非に、踏み迷ひて、私情の信義を守り、あたら英雄豪傑どもが禍に遭ひ、身を滅ぼし、屍の上の汚名を、後世まで遺せること、其例尠からぬものを、深く警めでやはあるべき。

一軍人は、質素を旨とすべし。凡そ質素を旨とせざれば、文弱に流れ、輕薄に趨り、驕奢華靡の風を好み、遂には貪汚に陷りて、志も無下に賤くなり、節操も、武勇も、其甲斐なく、世人に爪はゞきせらるゝ迄に至りぬべゝ。其身生涯の不幸なりと

いふも、中々愚なり。此風一たび軍人の間に起りては、彼の傳染病の如く蔓延し、士風も、兵氣も、頓に衰へぬべきこと明かなり。朕深く之を懼れて曩に免黜條例を施行し、將、此事を誡め置きつれど、猶も其惡習の出でんことを憂ひて、心安からねば、故らに又之を訓ふるぞかし。汝等軍人、ゆめ此訓誡を等閑にな思ひそ。

右の五ヶ條は、軍人たらんもの、暫くも忽にすべからず。さて之を行はんには、一の誠心こそ大切なれ。抑、此五ヶ條は、我が軍人の精神にして、一の誠心は、又五ヶ條の精神なり。心誠ならざれば、如何なる嘉言も善行も、皆うはべの裝飾にて、何の用にかは立つべき。心だに誠あれば、何事も成るものぞかし。況てや五ヶ條は、天地の公道、人倫の常經なり、行ひ易く守り易し。汝等軍人、能く朕が訓に遵ひて、此道を守り行ひ、國に報ゆるの務を盡さば、日本國の蒼生擧りて之を悅びなん。朕一人の懌びのみならんや。

第四課　谷村計助

谷村計助ハ日向國諸縣郡倉岡ノ士族ニシテ、父ヲ阪本利右衛門トイフ。後出デ、谷村ノ家ヲ繼ギ、明治五年熊本鎭臺ノ步卒トナル。七年二月、佐賀ノ亂起ルヤ、熊本鎭臺兵ヲ發シテ之ヲ伐ツ。計助、大尉和田勇馬ニ從ヒ、海路ヨリ佐賀城ニ入ル。賊兵遽ニ來リ攻メ、銃砲交々發ス。已ニシテ城中糧盡キ、彈藥亦乏シク、ソノ勢支フベカラズ。乃チ圍ヲ潰シ、賊軍ヲ衝カントス。時ニ計助、中軍ニ屬シ、門ヲ開キテ突進ス。賊四面ヨリ夾擊ス。官軍殊死シテ戰ヒ、遂ニ一方ヲ破ル。時ニ我ガ軍伍大

ニ亂レシカバ、分チテ三隊トナス。計助大尉奥保鞏ニ屬シ、且戰ヒ且走リテ、繩取村ニ至ル。小川アリ、賊前後ヨリ夾ミ攻ム。計助身ヲ挺デ、奮鬪シ、河ヲ涉リテ江見村ニ至ル。是ニ於テ計助、諸軍ノ、嚮導ヲ爲サンコトヲ誓ヒ、乃チ單身前行ス。衆皆之ニ尾シ、河津ニ達スレバ、計助既ニ船ヲ艤シテ待ツ。諸軍急ニ渡ル。賊軍追ヒ至レドモ、船ノ渡ルベキモノナシ。我ガ兵遂ニ陸兵ニ會スルコトヲ得タリ。此役ヤ、計助ナカリセバ、一部ノ衆或ハ河上ノ鬼ト爲リシモ未ダ知ルベカラズ。已ニシテ

官軍ノ援兵來リ諸道並ビ進ミテ佐賀城ヲ陷ル。計助戰フ每ニ人皆其膽勇ヲ稱セリ。

幾バクモナクシテ計助伍長ニ進ミ臺灣ノ役ニ從フ。九年神風黨ノ熊本鎭臺ヲ襲フヤ聯隊長乃木希典計助ヲ率ヰテ自ラ隨フ。蓋シ計助ノ倚ルベキヲ以テナリ。計助既ニ熊本ニ至リ將ニ小倉ニ赴キテ臺下ノ形勢ヲ報ゼントス。偶山口秋月ノ亂人幷ビ起リ諸驛騷擾ス。乃チ計助ヲシテ探偵セシム。計助形ヲ變シテ車夫ト爲リ諸方ノ動靜ヲ覘フニ異狀ナキヲ以テ小倉ニ歸レリ。十

年西鄕隆盛反シテ熊本城ヲ圍ム。城將谷干城守城ノ方略ヲ征討軍ニ報ゼントス。城中未ダ其人ヲ得ズ。聯隊長川上操六衆ト議シ計助ヲ擧ゲテ密ニ其意ヲ諭ス。計助之ヲ諾シ聯隊長ト俱ニ來リテ命ヲ乞フ。干城乃チ敎令ヲ授ク。計助退キテ煤煙ヲ全身ニ塗ル。黑質自然ノ如シ。因リテ襤褸ヲ著ケ笑ヒテ曰ク以テ賊輩ヲ欺クベシト。夜ニ乘シテ城ヲ出デ南關ニ赴カントス。賊ノ爲ニ縛セラル。計助百方解陳スレドモ聽カレズ。乃チ守卒ノ眠ルヲ伺ヒ爪ヲ以テ繩ヲ絕チ逃レテ潛行

會村計助總ヤフレテ旅團本營ニ至レル

ス。吉次山中ヲ過グルニ及ビ、再ビ捕ヘラル。計助伴リテ懦夫ノ狀ヲ爲シ、股栗垂泣眞ノ如シ。賊之ヲ憫ミ縛ヲ釋キテ擔夫トナス。計助復タ間ヲ得テ逃レ、遂ニ第一旅團ニ達ス。

初メ計助ノ縛ニ就クヤ、痛ク拷掠セラレ、飲食ヲ絕ツコト屢ナリ。其征討軍ニ達スルニ及ビ、哨兵ニ告グルニ實ヲ以テス。然レドモ顏色常ナラザルヲ以テ、信ゼラレズ、遂ニ縛セラレテ、本營ニ至ル。旅團長野津少將、計助ヲ召シ見ル。計助獻欷シテ言フコト能ハズ。既ニシテ徐ニ命ヲ陳ベ、且ツ狀ヲ說ク。其言語悲壯慷慨、聽ク者皆感歎ス。少將厚ク之ヲ遇シ、營ニ就キテ休止セシム。官軍田原坂ヲ攻ムルニ及ビ、計助戰隊ニ列センコトヲ請フ。許サズ。固ク請ヒテ已マズ。乃チ命ズルニ傳令ノ事ヲ以テス。偶官軍利アラズ。計助之ヲ

見テ、怒氣勃然トシテ抑フルコト能ハズ。蹶起シテ他人ノ銃ヲ奪ヒ單身叱咤シテ突入シ、遂ニ丸ニ中リテ斃ル時ニ年二十五ナリ。訃音至ルニ及ビテ、舉軍歎惜セザル者ナカリキ。

計助人ト爲リ、忠實寡言、上官ニ事フルコト恭敬ナリ。故ニ能ク使命ヲ達シ、終ニ奮戰シテ命ヲ殞ス。實ニ軍人ノ龜鑑トイフベシ。後同志相謀リテ、碑ヲ靖國神社ノ境内ニ建テ、忠烈ヲ不朽ニ傳フ。陸軍大將二品有栖川熾仁親王、篆額ニ題シテ、「軍人龜鑑之碑」トイフ。其文ハ谷干城ノ撰スル所ナリ。此事忝クモ聖聽ニ達シ、勅シテ其忠烈ヲ表シ、金若干ヲ賜フ。

第五課　塾規

立志

諸友學問心掛けられ候趣意は、第一倫理を辨へ、君子に成るべきためにて候。こゝに志なき輩は、假令萬卷の書を讀破候ても、學問心掛け候とは申がたく候。況して倫理は大學問、うか

と出來候義決〳〵て無之候。此志さへ立ち候へば、書籍讀み候事も、此志の内にこれあり候。誠に入學第一の義にて、かりそめに思はれ間敷候事。

勵行

「學者日用の間逢ふ所觸る所、朝晝暮夜、行を離れ候事これなく候。兎につき角につき、能く誠實に心を盡〳〵、輕薄浮躁の態なき樣に心掛けらるべき事に候。朋友會合の際は、言語の上緊要にて候。朋友も互に益を求め、仁を輔くるためなり」然るを無益の雜話に時を費さば、益なくして損あるべ〳〵。雜話の上より、自然と不遜にもなり、爭端を起す事にも及び候。か樣の義一切これなき樣に心掛けらるべく候。且少者は、長者を敬〳〵、長者は、少者を愛すべ〳〵。假令少者たりとも、業の勝れたるものは、業の先輩なれば、不敬なきやうに相談あるべし。「先輩たる者も、其長を挾み、後進を輕侮すれば、やはり長者の德なきゆゑに、後輩にかはる事これある間敷候。大抵朋友の義は、兄弟に等〳〵、其親愛の

心より切瑳あるべく候事。

游藝

「文字の事は、經說たりとも藝に屬すべし。學問中の一事にて候。嚴に課程を立て、其間に優游涵泳すべき事尤も候。」もし實行なくして、讀書作文のみに流れ候ては、何程經說に委く、諸子百家に涉り、詩文を巧に致し候ても、技藝にかはる事これなく候。書籍を離れ候ては、其餘常人に等〳〵かるべし。却て世人より譏を招く事數多これあり候。然れば實行ありての讀書にて候。

凡そ先輩に疑を質す、生きたる書を讀むに同じ。書を讀む事は、死たる先輩より訓を受くるなり。されば經義を講明するに當りては、先輩老人に對し、まの當り質義する心に成り、己を虛〳〵、其語を身に引當て、沈潛すべし、輕卒躁妄なるべからず。能くかくの如くなれば、讀書も亦即實行の一にて候以上。

三條の約諸友ともに確守いたすべく候。背馳これなきやうに心かけられ尤に候事

寛政十一年己未年九月

佐藤一齋……俗簡僕餘

第六課　名家の手簡　林　鶴梁

岡田鴨里に寄す

一書辯呈偖御宿疾如何被為渡り歟御業事中工候若し御病閑もゝはゞ別紙拙文昨今火急催促受け當惑に付御憐察なき法痛正奉希及も〻不用之候はゞ別紙題辭了德遣被ゝ奉存ゝ了れ成是迄長〻引留置候に付文の方に付度右願用迄急て草〻不一

第七課　世界周遊　其一

地球上ニハ五個ノ大陸アリ。亞細亞洲歐羅巴洲亞弗利加洲亞米利加洲及ビ阿西亞尼亞洲是ナリ。我ガ日本ハ亞細亞洲ノ東邊ニ位スル一島國ニテ誠ニ滄海ノ一粟ニ過ギズ。其東南ニハ渺茫タル太平洋アリ北ニハれこつく海アリ西北ナルハ日本海ニテ西南ヲ環繞スルハ支那海ナ

リ。對岸ノ國々ニハ朝鮮、支那及ビ魯西亞領ノ樺太、かむちやつかアリ。朝鮮樺太及ビかむちやつかハ我ガ境土ヲ距ルコト四里乃至數十里ニ過ギズ。

朝鮮ハ、古ヘ馬韓辰韓弁韓ノ故地ナルヲ以テ、三韓ノ稱アリ。後新羅、百濟、高麗ハ神功皇后ノ之ヲ征服シ給ヒシヨリ、永ク入貢シテ外藩ト稱シ、漢學佛教及ビ諸種ノ技藝ヲ傳ヘシコトハ歴史上ニ明ナリ、任那ハ早ク崇神天皇ノ朝ヨリ朝貢セリ、

朝鮮ハ、國内未グ開ケザルヲ以テ交通貿易ノ

朝鮮ノ五參

業甚ダ盛ナラズ、僅ニ釜山浦、元山津、仁川ノ三港ヲ開キテ、外國互市場トスルノミ。三港共ニ我ガ居留地ヲ設ク。殊ニ釜山浦ハ、我ガ國ニ渡航スル要津ナレバ、神功皇后ノ三韓征伐ヨリ、豐太閤ノ朝鮮征伐ニ至ルマデ、皆

上陸スルニ此地ヲ用ヒザルハ無シ。

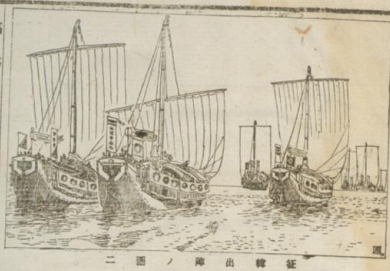
第八課　朝鮮征伐　其一

豐臣秀吉匹夫ヨリ起リ遂ニ能ク海内ヲ統一シ天下ノ政權ヲ掌握ス。而シテ心ニ自ラ足レリトセズ竊ニ朝鮮明國ヲ併呑セントス欲スルノ志アリ。乃チ明國久シク聘問ヲ絶チ朝鮮亦來貢セザルヲ以テ先ヅ其修好ヲ促シ聽カザレバ事ニ從ハントス。因テ先ヅ使ヲ朝鮮ニ遣ハシ諭シテ曰ク「吾明國ト舊好ヲ修メント欲ス貴國爲ニ之ヲ介セヨ」ト。朝鮮狐疑シテ應ゼズ。尋デ對馬守宗義智ヲ遣ハシ釜山ノ邊將ニ諭サシメテ曰ク「秀吉將ニ大兵ヲ發シテ明ヲ攻メントス。貴國ノ邊海亦必ズ騷擾セン。唯貴國速ニ明ト絶チ信ヲ我ニ通ゼバ此患ヲ免レン」ト。邊將之ヲ國王ニ奏ス。國王信ゼズ。義智要領ヲ得ズシテ空シク歸リ備ニ朝鮮ノ事情ヲ說キ且ツ其地圖ヲ獻ズ。

是ニ於テ秀吉意ヲ決シ諸將ヲ會シテ議ス。聲色俱ニ厲シ。諸將愕然敢テ答フル者ナシ。浮田秀家其忤フベカラザルヲ知リ進ミテ曰ク「殿下此

征韓出陣ノ圖一

大事ヲ擧グ誰カ努力セザランヤ」ト。議乃チ決ス。秀吉大ニ悅ビ、自ラ兵ヲ率ヰテ明國ニ赴カントス。其母大ニ憂慮シ寢食ヲ廢スルニ至ルヲ以テ浮田秀家ヲシテ代リ往カシメ、軍營ヲ肥前ノ名護屋ニ造リ、自ラ出デ、之ニ居ル。時ニ文祿元年二月ナリ。



征韓出陣ノ圖二

秀吉將ニ京師ヲ發セントスルニ臨ミ、或ル人謂テ曰ク「盍ゾ漢文ヲ善クスル者ヲ從ヘザル」ト。秀吉笑ヒテ曰ク「吾此行將ニ彼ヲシテ我ガ文ヲ用ヒシメントスルノミ」ト。已ニシテ名護屋ニ至ル。西南四道ノ兵二十萬人ヲ分チテ水陸九軍ト爲シ、八軍ヲシテ朝鮮ノ

八道ニ向ハシム。浮田秀家ヲ元帥トナシ、加藤清正、小西行長ヲ先鋒ニ、九鬼嘉隆、加藤嘉明ヲ水軍ノ將トス。諸軍閧シテ帆ヲ揚グ、舳艫相啣ミ、進ミテ朝鮮ニ入ル。

第九課　朝鮮征伐　其二

行長先ヅ釜山浦ニ上陸シ、守將鄭撥ヲ斬リ、東萊ヲ拔キ、漢城ヲ陷ル。韓王李昖出デヽ、平壤ニ奔ル。清正ハ行長ニ後ルヽコト三日ニシテ、釜山浦ニ至ル。行長既ニ進ムト聞キ、轉シテ別路ヨリ咸鏡道ニ入リ、韓ノ二王子ヲ擒ニス。諸將相繼ギテ進ム。轉戰皆捷チ、殆ド無人ノ境ヲ行クガ如シ。李昭使ヲ馳セテ援ヲ明ニ乞フ。

七月明主李如松、祖承訓、史儒算ヲ將トシ、精兵五千ヲ率ヰテ來リ援ケシム。承訓人ニ問ヒテ曰ク、「平壤ノ和兵已ニ退クヤ否」。曰ク、「未ダシ」。承訓酒ヲ擧ゲテ祝シテ曰ク、「天我ヲシテ大功ヲ爲サシムルナリ」ト。進ミテ平壤ニ逼ル。行長逆戰シテ大ニ之ヲ破リ、北グルヲ追ヒ、史儒算ヲ斬ル。承訓纔ニ身ヲ以テ免ル。時ニ辯士沈惟敬ト云フモノア

リ、多ク金帛ヲ行長ニ致シ、辭ヲ卑ウシテ和ヲ謀ル。行長悅ビテ遂ニ和ヲ約ス。

二年正月、明將李如松大擧シテ平壤ヲ攻ム。行長始メテ惟敬ガ言ノ詐ナルヲ覺リ、急ニ守備ヲ修メ、殊死シテ之ヲ拒グ。時ニ援兵ナキヲ以テ、行長敗レテ漢城ニ退ク。如松勝ニ乘シ、皷行シテ南ス。小早川隆景、立花宗茂、毛利秀包等、如松ヲ碧蹄館ニ邀擊シテ、大ニ之ヲ敗ル。斬首一萬餘級、如松纔ニ身ヲ以テ免ル。

如松ノ敗報明ニ達スルヤ、擧朝震駭ス。乃チ惟敬ヲシテ再ヒ和議ヲ圖ラシム。惟敬厚ク行長ニ賂ヒ、說キテ曰ク、「大閤韓俘ヲ還サバ、慶尙、全羅、忠淸ノ三道ヲ割キ、封シテ王ト爲サン。是レ足利氏ノ故事ヲ修ムルナリ」ト。行長素ヨリ不學ニシテ、封王ノ故事ヲ知ラズ、思ヘラク明國ニ王タルノ謂ナリト。乃チ秀吉ニ報シテ曰ク、「明人殿下ヲ封シテ王ト爲サント欲ス」ト。秀吉之ヲ許シ、韓ノ二王子ヲ放還シ、戍ヲ釜山浦ニ置キ、諸軍ヲシテ引キ還ラシム。

太閤秀吉明ノ封册ヲ受ク

第十課　朝鮮征伐　其三

慶長元年九月、明使楊方亨、沈惟敬韓使黃愼朴弘長伏見ニ到ル。時ニ朝鮮未ダ三道ヲ獻ゼザルヲ以テ秀吉韓使ヲ見ルコトヲ許サズ、特ニ明使ヲ延見ス。明使膝行シテ進ミ、敢テ仰ギ見ルナシ。秀吉侍史ヲシテ册文ヲ讀マシム。文中爾ヲ封シテ日本國王ト爲ス

ト曰フニ至リ秀吉色ヲ變シ、册文ヲ地ニ擲チテ曰ク、「嚮ニ明我ヲ封シテ明王ト爲サントス、故ニ命シテ師ヲ班サシム。日本ニ王タルニ至リテハ、何ゾ彼ノ命ヲ煩ハサンヤ。且ツ吾ニシテ王タラバ天朝ヲ如何」ト。乃チ行長ヲ召シテ之ヲ誚メ、即夜明韓ノ使者ヲ逐ヒ、令ヲ下シテ再ビ朝鮮ヲ伐タシム。

翌年正月、小早川秀秋ヲ以テ元帥ト爲シ、兵十四萬人ヲ發シテ朝鮮ヲ伐ツ。諸將ノ部署皆前役ノ如シ。我ガ軍釜山浦ニ入ル。韓王驚キテ復タ援

ヲ明ニ求ム。明將邢玠楊鎬等、大兵ヲ將ヰテ來リ援ク。我ガ軍山海ノ形勢ニ據リ、聯珠ノ砦ヲ築キ、以テ根據ノ地ト爲シ、進ミテ全羅ヲ陷ル。十一月天漸ク寒シ、諸將退キテ要害ヲ守ル。明將清正ヲ蔚山ニ圍ム。城中飢渴甚ダシ。清正屈セズ。諸將赴キ援ク。清正城ヲ出デ、夾擊シ、大ニ明軍ヲ破ル、伏屍數十里ノ間絕エズ。是ニ於テ明主楊鎬ヲ罷メ、萬世德ヲ以テ之ニ代ヘ、邢玠ヲ助ケテ來リ攻ム。我ガ軍四屯ト爲リ、秀秋ハ釜山ヲ守リ、清正ハ蔚山ヲ守リ、行長ハ順天ヲ守リ、島津義弘ハ泗川ヲ守ル。明兵畏懾シテ敢テ來リ窺ハズ、我ガ軍モ亦深ク入ラズ。

慶長三年八月、秀吉病デ薨ズ。遺命シテ外征ノ師ヲ班サシム。此役ヤ前後六年、死スル者十萬餘人ナリトイフ。

第十一課　農事　其一

五穀は、人世生養の本にして、人間貴賤の命のかゝる所、農術は、大なる業にして、神聖の至りて重んじ給へる理をば、略々會得する人ありとも、

農事をよく知らざる人は、猶世の風俗にならひて耕作の勤至れば福ある事を深く辨へず〳〵て、老翁が說を唯よ〳〵なき昔語りの譫語なりとよろに聞ける事も有りなん。農民も又秀でたる才なきは、〳〵か有るべし。是によりて、翁が年ごろ耳に觸れ、目に見し事ども多き中に、其内に二三を擧げて、其事を記〳〵農術の勤よく熟すれば、必ず大なる福ある理の證となすべ〳〵。

茲に市中に隱れ閑居〳〵て、世の外なる老人あり。若年より諸家に仕へ、或は浪人となりて國々を經歷し、廣く世事を知れる者なり。此翁語りけるは、或る國にて少〳〵の祿を得て、片山里に住む者あり。其勤も僅の事にて、常に暇有りければ、早年より下人に耕作せさせ、己れも農事を考へ計りて、樂と〳〵、又渡世の助とも〳〵けり。此男少〳〵才ありて、年老いぬるまで、久〳〵く農事に手馴れければ、農業に於て妙を得たる事多し。

又一年の内に、二三度も其國の長臣に出でゝ見にけるに、田舍に居て、別に語るべき事知らねば、己れ耕作に熟し、多く穀物を得たる事のみを

語りけり。生質陽氣なる男にて、其詞さへ田舍びていかめ〜ければ、聞く人皆彼が放言僞なりと、面にくげに覺え、長臣も亦疑ひ思ひて、さらば我が采地の内にて、一段汝が云ふごとく作り見せよとて、取分き地味の惡〜き村にて、惡田を擇ばせて、渡しぬ。はげ山の谷あひ、極めて磽地の常に赤土色の水ありて、かなけのさび出づる地なり。

彼の老人、此惡田を受取りて、つくづく打見て、其田の一方に、深さ三四尺に大溝を掘らせて、彼の惡水を落し、其跡をたび〜すき返し、春中日に晒〜て、干田とな〜、五月雨に苗を種ゑけるに、年久〜き水田を春中晒〜こな〜て、陽氣をこめ、雨を得て腐らか〜、柴草を多く入れて作り立てければ、稻の榮え、さながら淀の邊の蘆の如くでき、秋の實りも殊によくて、八俵餘の米を得たり。此田農人常に作りけるには、十年にも餘りて、其實り三俵に及ぶ年あれば、奇代の滿作とて、甚だ悅びけるとかや。

宮崎安貞……農業全書

第十二課　農事　其二

又或る國の田舍に、浪人の居けるが、渡世の助に、田畠を一年ぎりみ買ひて、下人に作らせけり。ある時、その里近き湊に、干鰯を積みたる船泊りけるを聞きて、農民ども、打群れて干鰯買に行きけるに、彼の浪人は、價なかりければ、富人の買ひたるを一俵貰ひて、それを木綿烟草の糞と〜、其餘の少し有りけるを、五畝六畝ばかりなる田に入れて、苗をうゑぬ。下地を能くこな〜調へける故にや、僅の糞なれども、暑氣に及び、稻大に榮にて、秋の實り、米六俵餘を得たり。此里極めて地味あしく、其年貢四つ物成にあたる事稀なり。然るに右の田のみは、實り甚だよろ〜とて、其年十一成の年貢をかけたりとかや。

又小身なる士、深き山里に住みけるが、下人の暇あればとて、少〜田畠を作らせけるに、五月雨の頃、遠所に有りける子のもとより、見舞と〜て、下人に酒肴などもたせ遣〜けるを、親甚だ悅び、耕作の最中、劇しき折節來るこそ幸なれとて、使の男を一日留め置きて、田に入るゝ、草をからせ

けるに、山中草多きところなるゆゑ、よき草を二十五六把切出〳〵けり。前より刈り置きたる草に、是を加へて、田に入れ、時分よく苗を種ゑければ、大に榮にはびこりて、秋に至り、米五俵半を得たり。此田も、農人前々より作りては、極めて豐年にあひても、漸く米二俵半ほど出來ぬれば、稀なる幸とて悅びけるとなり。

右の事語りける老人は、一代一事の虛言もいはず、少〳〵佛學など志〳〵て、其心ばせ淨きものなりとて、あひあふ俗人まで、愛を加へ敬ひあへるものなり。此翁面り見たりし事なりと云ふ。又愚老が所々にて見聞きしにも、是に同〳〵き事多けれども、一つ事を今更書付けんもいたつがはしくて止みぬ。

第十三課　老成の言は侮るべからず

宮崎安貞……農業全書

老人長者の言は、少壯の人情にて、これを聞けば、迂闊なること多けれども、年の功を積みて、事とわざとを經〳〵事れほければ、後日に必ず〳〵る

しあり。少壯の人は天資聰明の人といへども見識終に及ばざる所あり。然るを後生の輩は例〳〵て老人のことを迂闊とす。老人はその身に試みて効ある言を以て訓となさんとす。然るに後生は聞くを厭ひて之をうしる。其もの年やうやく長〳〵事に涉ることやうやく多きに及びて始めて老成の言の佩服すべきを悟る。これはれのが險阻艱難をつぶさに嘗めたる後にあらざれば知り難し。

荒井兎民……梧坡教論

第十四課　青木昆陽

昆陽は名を敦書字を原甫通稱を文藏といへり。武藏の人なるが、一たび京都に上り伊藤東涯の門に入りて儒學を學べり。然れども訓詁の業を嫌ひてひたすら實用をのみ主としたり。

昆陽常に思へるやう、凡そ律に罪科を負ひて、遠流に配せらるゝもの、一旦死を宥めらるゝ限りは、天命を終へしめんの義なるべし。然るに諸島の地は概ね磽确にして、五穀熟せず、中には沃

饒なるもあるべけれど時に凶歳のあらんをいかゞはせん。是のみならず諸國の農民粒々辛苦に一生を齷齪〜ながら一朝凶荒にあへば餓莩野に盈ち草賊衢に起りて天下の患となること歎くにたへたり。若〜穀物にかふべき食料あらば餓莩を救ひ草賊を鎭め且は流人の餘命をも全うするよすがなるべ〜。されには薯蕷こそ良策ならめ。されども其功德と種藝の法とを知ら〜めずば益なからんとて年來考究せる事どもを懇に書き集めて之を幕府に奉りしに將軍これを覽て奇特の事なりとて官資を以て刊行〜、普く諸國諸島に頒ちて便宜に種藝せ〜めしかば是より庶民凶歳にあへども薯蕷を糧として飢ゑを免るゝに至り〜より〜の惠を語りあひつゝ世上にいつとなく昆陽を崇めて甘藷先生と呼びなせり。

されば元文四年處士より直に幕府の吏員にあげられ後評定所の儒者となり又御書物奉行に昇進せり。昆陽はじめ白石の著書に就て粗蘭人の說を窺ひ大に發明する所ありて、より〜

蘭書を講讀せしが當時の將軍吉宗も、推步の學を好み、和蘭の其術に精〳〵きを知り、猶も其說を聞かんとて、昆陽に命じて蘭語を學ばしめたり。其後延享元年に至り、命によりて長崎に往き、親〳〵く蘭人に就き、又譯官にも謀りて、倍原書を講習せり。年を經て江戸に歸り、大に蘭學の擴張を計らんとせ〳〵が惜むべ〳〵、吉宗將軍の薨去にあひしかば、其事遂に止みにき。

前には、白石ありて蘭學の端緒をば開きたれども、當時なほ禁書の令ありて、公に原書を講ずるを得ざり〳〵に、昆陽の時より〳〵て禁令解けたり。近世洋學の盛になれるは、昆陽が唱導の力に賴る事多きに居る。

第十五課　世界周遊　其二

支那ハ世界ノ舊國ニテ、四千年以前ヨリ文學技藝既ニ進步シ、四隣ノ國ニ其風教ヲ及ボセリ。有名ナル孔子ハ、此國ニ生レタル大聖人ナリ。我ガ國ノ支那ト交通セシハ、今ヨリ凡ソ一千三百年前、隋ノ代ニ在リ。支那ハ古ヨリ定マリタル國

號ナク天子ノ代ニヨリテ其號ヲ異ニセリ。周秦、漢隋唐宋元明ハ皆舊時ノ國號ニテ今ハ清ト曰フ。我ガ弘安年中元兵十萬大舉來襲スルニ及ビテ北條氏之ヲ九州ノ海上ニ鏖ニシ大ニ國威ヲ耀カシヽコトハ諸子ノ既ニ聞キタル所ナルベシ。

支那ノ京城ヲ北京ト曰フ。世界大都ノ一ニテ、宮殿樓閣最モ美麗ナリ。然レドモ道路市店頗ル雜沓ヲ極メテ清潔ナラズ。萬里ノ長城及ビ運河ハ世界屈指ノ大工事ナリ。長城ハ昔秦ノ始皇帝

ガ匈奴ノ襲來ヲ防ガン爲ニ築キシ煉瓦ノ城壁ナルガ其長サハ五百十餘里ニ亙リ高サハ二丈五尺厚サハ一丈五尺アリ。運河ハ天津ヨリ起リ、黃河楊子江ヲ過ギテ杭州府ニ達ス其長サ二百七十餘里アリ。

上海ト香港トハ共ニ船舶輻輳ノ要地ニテ通商貿易極メテ盛ナリ。上海ニハ我ガ商店多シ。此地ニハ我ガ國ノ領事廳ヲ置キ郵便局ヲ設ケラル。香港ハ廣東府ヲ流ル、珠江口ノ島中ニ在リテ今ハ英國ノ所領ト爲レリ。我ガ國ヨリ西洋諸國ニ航スル人ハ必ズ此港ニ寄泊ス。橫濱ヨリ航程四日ニシテ達スベシ。

又香港ヨリ西スルコト三日程ニシテ馬來半島ノ新嘉坡港ニ着スベシ。此地モ亦英國ノ所領ニテ東西往來ノ船舶必ズ寄泊セザルナシ。土地赤道直下ニ當レルヲ以テ氣候ハ頗ル炎熱ナリ。

第十六課　財を用ふる法

儉約にして財を費さゞるは尤も良法なり。然れども儉約を行ふに事寄せて財を吝みて禮義

を缺き、仁愛を施さゞるは、鄙狹と謂ふべし。是れ儉約に非ず、吝嗇なり、不德なり。禮義を務めて財を用ふべく、與ふ可き時ならば、財を惜まずして潔かるべし。

又貧窮を救ふに於ては、財を惜む可らず。我身には奢り費して、禮義を缺き、人に施し惠まざるは、不德なり。財を惜みては善を行ひ難しと古人も云へり、宜なるかな。

又無益の事に財を費して惜まざる人有り。愚なりと謂ふべし。無益の事に財を用ふるは、濁に棄つるに同じ。是れ善を行ひ人を救ふの道を知らず、其志無き故なり。むだの事なり。

凡そ一年の衣食の費は多からず。やどりは茅屋一間に起臥して足りぬ。下部は我勞に代はる人の外は、無くても事缺けず。器はたゞ飲食の器、日用の調度のみ助となる。其外の器皆用なし。人の身を養ふには、此數多の物に過ぎず。之を備ふるはさ程の費多からず。然れば財祿有る人儉約をだに行はゞ、みづから奉ずるに餘有るべし。不

足〜て人に乞ひ借るに及ぶ可らず。

然るに財用を多く費し過ご〜て人に乞ひ借り、自ら困窮に至り、一生身を苦め人を苦め子孫まで困窮せ〜むるは哀むべし。是れ用財の良法を知らざればなり。

貝原篤信……家道訓

第十七課　金ヲ借ルコトノ危キ事

「諺ニ空虛ナル囊袋ハ直上ニ立ツコト能ハズト云ヘルガ如ク借債ヲ負フ人モ亦正シク立ツコト能ハズ。蓋シ人債欠ヲ負フトキハ必ズ眞實ノ行ヲ缺クニ至ルベシ。故ニ諺ニ欺僞ハ借債ノ背上ニ騎スト云ヘリ。金ヲ借ル人ハ往々ソノ債主ニ向ヒテ金ヲ返ス期限ヲ延サン爲メニ虛誕ノコトヲ揑造シテ托辭トスルコトナリ。故ニ借債ニ於テ一歩進ムトキハ欺僞ニ於テ亦一歩進ム。カクノ如ク借債欺僞互ニ相陸續追隨シテ、一生ノ路ヲ行クコト豈悲シカラズヤ」。畫家海曇自ラソノ衰微セシ起リヲ始メテ金ヲ借リタル日ニ歸シテ曰ク「金ヲ借ルコトニ往クモノハ憂ヲ

取ルコトニ往クナリトイヘル古諺ヲ吾ガ身上ニ的實ニ覺エタリ」ト。又一少年始メテ海軍ニ入ル時海氏コレヲ戒メテ曰ク「他人ヨリ金ヲ借ラズシテ買ハル、時ニ至ルマデハ、決シテ何物ニテモ買フコトナカレ、決シテ金ヲ借ルベカラズ、金ヲ借ルハ、自ラ我ガ身ヲ賤シクスルナリ。予決シテ汝ニ金ヲ借サズトハ云ハズ、タヾ汝ニ借シテ、汝コレヲ償フ能ハザレバ、コレ予レ汝ノ品行ヲ嫌ルナリ」ト云ヘリ。

中村正直――西國立志編

第十八課　世界周遊　其三

「新嘉坡ヲ出帆シテ西ニ進航スレバ、印度ノ南海岸ナル錫蘭島ノころんぼニ着スベシ。印度ハ、謂ハユル天竺國ナリ。釋迦如來出生ノ地ハ實ニ此錫蘭島ナリ。此國學術工藝ノ早ク開ケシコト、世界中其右ニ出ヅルモノナシ。釋迦ハ、今ヨリ三千年前ノ人ニテ、其教ハ、支漸シテ支那朝鮮ニ波及シ、遂ニ我ガ國ニ傳ハレリ。」

然ルニ印度ハ、元來小國分立シテ、一統ノ君主

ナカリシガ爲メ屢西洋諸國ノ侵略ヲ被リ現今其十分ノ九ハ英國ノ領地ニ屬セリ。國内ニハ猛獸毒蛇多ク獅子虎犀象鰐魚等ノ害ヲナスコト實ニ大ナリ。此國ノ北境ニハ喜馬拉耶山アリ高サ凡ソ二萬九千尺ニシテ四時ニ雪ヲ戴キ世界第一ノ高山ト稱セラル。

錫蘭島ハ寶石ニ富メル地ニテ金剛石其他ノ珠玉ヲ出ダスコト最モ多シ。土人ハ過半佛教ヲ信ズレバ從テ伽藍ノ大ナル者モ少カラズ。

ころんぼヨリ西ニ進メバ亞拉比亞海ヲ經テ、

亞拉比亞ノ亞丁ニ着スベシ。亞拉比亞ハ駿馬ノ産アルニ由テ聞ユ。此土ノ馬ハ骨格逞シクシテ力最モ强シ實ニ天下ノ良種ナリ。マタ護謨ヲ出ダスコト多シ謂ハユル亞拉比亞護謨是ナリ。

亞拉比亞ハ全國殆ド沙磧ニテ唯沿岸ノ地ニ二三ノ都邑ヲ見ルノミ。亞丁ハ紅海出入船舶ノ碇泊スル處ニテ英國ノ所領タリ。西岸ニハ麥迦及ビ麥地拿ノ名邑アリ。麥迦ハ回々教ノ開祖摩哈麥ノ降誕セシ地ニテ麥地拿ハ其入寂ノ處ナレバ信者ノ參拜頗ル多シ。

紅海ヲ北ニ向ヒテ進航スレバ亞弗利加洲ノ蘇士運河ヲ通過ス。

蘇士運河ノ圖

此運河ハ、明治ノ初年ニ始メテ疏通セシモノニテ其未ダ開鑿セザリシ時ハ東西航行ノ船舶皆亞弗利加洲ノ南端ナル喜望峰ヲ迂回シタリ。サレバ數十日ノ日子ヲ費シタルノミナラズ風波ノ險亦甚ダシカリキ。運河ヲ通過スレバ即チ地中海ニ出ヅ。ぽーとさいどノ良港アリテ船舶必ズ此ニ寄泊ス。

亞弗利加洲ハ全土殆ド未開ニシテ廣闊ナル原野ニ過ギズ。近年歐羅巴人內地ノ探撿ヲ試ムル者少カラズ。中ニモ其効ヲ奏セシモノヲすたんれいトス。蓋シ內地ハ草木深ク茂リテ道路通ゼズ深莽ノ中猛獸毒蛇多ク且ツ土人往々人肉ヲ啖ヒ各處ニ居住シテ旅人ヲ見レバ直チニ殺

害スル等ノ危險アルガ爲メ實ニ困難ノ業タルナリ。

第十九課　馬盜人

昔亞拉比亞にナーベルといふ人ありて、類ひ稀なる駿馬一頭を持あたるが、評判遠近にかくれなかり〜かば、ダーヘルといふ人、いたく之をほしがりて、己が財産を擧げて、此馬を買はんと望みしかども、ナーベルは、中々承知せず。されば、ダーヘルは、ほとんど絶望せ〜程なり〜が、猶も

初念は全く消え難くして、遂に一計を案〜出だせり

こゝにダーヘルは、或る草の汁液を顏に塗りつけて、容貌を變へ、襤褸に身を纏ひ、片足を包みなど〜して、乞食の樣を裝ひ、駿馬の持主ナーベルが通行する道端に待ち居たり。

さてナーベルは、彼の馬に跨り、此方に來かゝり〜かば、ダーヘルは、馬の前み身を投げ出だ〜て、いとも憐れなる聲をしつゝ、「奴は、圖らずも途にて病にかゝりたり。此處より一歩も動くこと

能はざること最早三日に及び候へば、今は飢ゑ果てゝ、唯最期を待つばかりに候。慈悲深き殿よ、いかで露の命を助け給へ」と息も絶え〳〵に訴へしに、ナーベルは、元來慈悲深き人なり〳〵かば、計略に乘るとは知らず、「さらば此馬にて伴ひ歸らん」と曰ふ。

されどダーヘルは、猶も、「奴は弱り果てゝ、馬に跨ることも出來候はず」と曰ひしかば、益、あはれと思ひ、己れ馬より下りて、此僞乞食を扶け乘せたるに、乘るや否や、ダーヘル馬に一鞭あて、「余はダーヘルなり、汝固く余が請を承諾せざり〳〵かばかくたばかりて奪ひ〳〵なり」と高らかに罵りつゝ、雲を霞と驅け出だせり。

ナーベルは、驚きながらも、暫く待て言ふ事あり」と呼び止め〳〵に、我は馬上彼は徒歩追捕せらるゝ患なしと知りたれば、ダーヘルは、馬を二三間彼方に止めて、「何の用ぞ」と問ひ返す。

ナーベルは、「汝我が馬を奪ひ〳〵も天命なれば仕方なし。唯余の願ふは、汝が如何にして余が馬を奪ひ〳〵かを人に語ることなからんことを」と

曰ひしかば、ダーヘル「それは何故ぞ」と問ふ。

暫く待て言ふ事あり

ナーベル「さればなり、世の人若し此事を聞かば、他日眞實に病み疲れたるものある時、たとひこれを見る人ありとも、又余の如く欺かれんを恨れて、これを助けざるに至るべし。されば汝は人の慈善の行を妨ぐる基となるべし」と曰ふ。

此一言を聞きて、ダーヘルはいたく耻ぢ入り、暫時はものも言はざりしが忽ち馬より飛び下り、之をナーベルに返して其罪を謝ぶたり。これよりナーベルは、ダーヘルを我が家に伴ひ歸り、數日の間鄭重に饗應したりしが、遂に兩人は刎頸の交を結びしとぞ。

第二十課　自暴自棄

自暴自棄と云ふは、何樣の、いましめを聞きても、用ふる事なく、人の善事を見ても學ばんとも

愚はず、只我が儘に〜て、我が惡〜き事を改むべし、といふ志も無く、或は善事は、我等如きの曾て成らぬ事なりと、片付け置きて、我と我が身を棄物に〜て、惡事を仕通〜、少しも善事に進む心無きなり。此の如く自暴自棄なる人は、人面獸心とて、顏は人の顏なれども、心は獸の心なり、志を起して、惡〜き事を改むるならば、など善人にならざらんや。

伊勢貞丈……貞丈家訓

第二十一課　世界周遊　其四

地中海沿岸ノ國ニハ、古來歷史上有名ノ地多シ。中ニモ小亞細亞、希臘以太利ヲ以テ最トス。小亞細亞ハ、上古ヨリ人民ノ繁殖セシ國ニテ、古蹟頗ル多シ。其地中海ニ瀕スル地方ハ、古ノ猶太國ナリ。京城にるされむハ、今猶ホ繁昌ス。城外ニべつれへむノ名邑アリ。即チ耶蘇基督ノ誕生地ナレバ、教徒ハ之ヲ神聖地ト稱シテ、諸國ヨリ巡拜スル者少カラズ。

希臘ハ、歐洲開化ノ根本ヲ爲シタル國ナリ。京

城雅典ハ古代歐洲學藝ノ中心タリシヲ以テ今ニ至ルマデ天下ノ人其名ヲ知ラザルハナシ。

以太利ノ羅馬府ハ希臘亡ビテヨリ文學技藝ノ隆盛ヲ致シタル地ニテ天下ニ有名ナリ。府内ニハ古代ノ名畫彫刻等夥シク寺院堂宇ノ壯麗ナル者亦多シ。

「地中海ノ ゑゝり一島ニ有名ナル火山アリ。にとな山ト曰フ。餘々トシテ火烟ヲ噴キ地中海ノ燈明臺ト稱セラル。地中海ト大西洋ト通ズル處ハ謂ハユル じぶらるたるノ海峽ナリ。其北岸ニ

ハ英人砲臺ヲ構ヘテ之ヲ守衛ス。此地ハ元ト西班牙國ノ中ナレドモ今ハ英領ニ歸セリ。實ニ地中海ノ咽喉ニテ要害無雙ト稱セラル」

昔ハ東洋ヨリ歐洲諸國ヘ渡航スルニハ じぶらるたる海峽ヲ廻リタレドモ今ハぽーとさいど港ヨリ直チニ以太利ノぶりつぢゝゆニ航シ、更ニ汽車ニヨリテ歐洲諸國ニ出ヅルナリ。ぽーとさいど港ヨリぶりつぢゝゆヲ經テ英國倫敦ニ達スル時間ハ凡ソ四日半ナリ。

第二十二課　珊瑚の話

「珊瑚を用ふることを知りたるは、極めて舊けれども、其性質を明に〜たるは、遙に後の世にあり。かの古代の野蠻人と雖も、尙且つ珊瑚を以て、小刀、斧の柄の飾りと爲すことをば知りたるが、後漸く人智開けて、鐵を利用し、武器等を造るに至ては、珊瑚を以て、楯若くは冑の飾りと爲〜、或は、婦人の頭飾、服裝等と爲すに至れり。是れ其色赤く〜て美なればなり。」然れども、此等の野蠻人は、言ふも更なり、智識開發〜たる人民にても、尙

未だ珊瑚は、何質のものなるかを知らんと欲するの念なかりしは明なる事實なり。

かくて、人智尙ほ一層高く進みたる時に至り、漸く珊瑚の性質如何に就て考究する事おこれり。されども、尙ほ久しく一定の確說はあらざりしなり。此等の人民が第一に斷定せしは、珊瑚の質甚だ堅牢にして、且つ美麗の光澤あるが故に、鑛物なりとせ〜こと是なり。其後尙ほ幾多の經驗に依て、智者は總〜て植物なりとの斷定を下〜たり。是れ珊瑚の幹部は、他の樹木と均〜く、數

多の輪より成り、又此幹部より枝を生じ、枝の皮は薔薇色を爲し、皮の内には星の如き小さき花あればなり。

然るに茲に一の疑問あり。曰く、「珊瑚を目して植物なりとせんか植物にして、其質の堅きこと恰も石の如くなるは、果して如何の理由に基けるぞ。植物中、其質の斯の如きものは、決して此他に例を求め得べからざるなり」。

漁夫等は、右の疑問に答へて曰く、「珊瑚の、尚ほ水底に在る時は、恰も右の植物の如く、其質甚だ柔かなり。されども之を水中より引上げて、空氣に觸れしむれば、忽ち化石して堅くなるものに相違なし」と。

右の如き說の行はるゝこと既に二千年の久しきに及べり。然るに、佛國の醫師ペーソンヂルと云へるものありしが、曾、地中海の海岸を旅行するに際し、同所にて珊瑚採獲の盛に行はるゝを視て、大に感ずる所あり、乃ち珊瑚を取て、謂はゆる珊瑚の花なるものを仔細に觀察せしに、終に花にあらずして、一種の動物なることを見出

だしたり。如何なる點より視ても、花たるべき資格は決〳〵て有せざり〳〵なり。即ち雄蘂もなければ、雌蘂もなく、又花粉もなく、種子を生ずべきものもなし〳〵。唯形の聊か花に似たる所あるに過ぎざるのみ。

然れども、多年行はれたる舊說は、一朝田舍醫師の新說を以て、容易に破られ得べきにあらざれば、當時珊瑚を動物なりと信ずるは、僅にベーソンチル氏一人のみに〳〵て、其他の人々は、擧りて珊瑚は植物にて花咲くものなりとの說を信

珊瑚の海底に在る狀

じ居たり。

然れども、誤信は永續すべきにあらず。玆にニコライと云へるものありて、珊瑚採獲の監督者たり〳〵が、珊瑚の水底にある時、果〳〵て柔にして撓み易きものなりや否やを實地に試みんと欲〳〵

其部下中の最も老練なる潛水夫を選びて、之に、其探索を命じたるに、珊瑚の堅きことは、水中に於けるも、矢張り空氣中に於ける時と、全く同一なりと復命したり。ニコライは、之を聞きて大に驚きつゝ、愈實證を得たしとて、更に自ら水中に入りて、之を試みしに、果して其言の違はざることを見出だしたり。

尙ほ此他にも、珊瑚に就ての考究は、種々爲されしより、ベーソンネル氏の說愈正確なりと定まりたり。即ち珊瑚の枝に、小さき星の如き飾り

と見ゆるは、全く一種の動物に外ならず。數千百年間學者が無智なる漁夫等の言ふ所を信じて、敢て其他の探究を爲さんともせざりしは、實に無智も亦甚だしといふべし。

是より後、學者頻に珊瑚蟲の性習如何に就きて考究する所ありしに、實に人の耳目を驚かすべきことを發見せり。

第二十三課　珊瑚の話　其二

抑、珊瑚蟲は、其形極めて小なるが故に、顯微鏡

の力を借るにあらざれば、明に見ること能はず。此小蟲は圓筒形にして、其一端に口あり。口の周邊に數多の觸手あり。是れ花の如き形を現する所なり。此小蟲の食物を得るは、此觸手の作用に基つけるなり。其食物は、死魚の極小なる分子、或は大魚の口中より發する動物質等なり。斯の如く食物を取て、其身を養ふ所以を知ると雖も、之を聞き之を視るべき力を有するの痕跡なく、又之を手にするも、自ら感ずべき力を有せざるものゝ如し。且つ此小蟲は、生來一所に停住して、毫も他に移轉することなし。

此小動物は、動物中にても、最下等に屬するものなり。數個となく、層々相重なりて、水底に大なる石の林とも謂ふべきものを構成するのみならず、峨々たる巖石の障壁重疊せるかと見ゆるものあり。其廣大なるものに至ては、時として數十百里に亙れるものさへあり。而して珊瑚は、此動物の體軀中に存する石灰樣の物質と、其死後の石灰樣の體軀より成れるものに外ならず。

珊瑚蟲の群生するは、溫暖なる地方に限れる

ものなり。珊瑚蟲は寒氣に耐へ得べきものにあらず、又空氣中には其生を保つこと能はず。是れ水面より離れて其働きを爲すこと能はざる所以なり。

枝分せる珊瑚に三種類あり。白色、赤色、石竹色是なり。此内白色は、孔隙多くして、其價最と低けれども、石竹色に至ては甚だ稀なるが故に、其價最も高し。

珊瑚蟲は、赤道の南北各三十度以内に在りて盛に繁殖し、或は數百里に跨る所の島嶼を作り、

或は渺茫たる大洋の中央に、安全の良港をなす者あり。細微なる蟲の事業も亦偉なりといふべし。此小動物が、之を造る初めの手續は、遙か大洋の下底なる砂中に業を起し、之を怠らず、次第次第に高く積みあげて、終に岩石の壁の如くなりて、水面に現はるゝに至る。既に水面に現はれたる以上は、最早其工を進むる能はずして、業こゝに卒れるものとす。此等の壁は、概して廣き圓形を爲せるものなり。

かくて岩石の如く成れる珊瑚の壁、水面上に

達したる時は、波浪絶にず其上を經過し從て小砂及び珊瑚の碎片を携へ來りて、其上に留むべし。此作用絶にず〳〵て、終に波濤其上を經過すること能はざる程の高さに達し、遂に一種異形の島嶼を造れるなり。此島嶼は廣く圓形を爲せる

岩石より成れるが故に、其中央に自から一面の平湖を形づくれり。斯くて又波浪絶にず、此岩石の上に小砂を携へ來り、從て中央なる湖水の中に小砂を落〳〵、久〳〵き年月を經る内に、遂に若干の地所を生ず。雜草と海草と其面に生ず。葉枯れ根死〳〵たる草は、其地を膏腴なら〳〵め、而〳〵て風亦他の海岸より、棕櫚其他種々の植物の種子を携へ來りて、此島嶼に播し、以て忽に花を看、鳥を聞くべき綠野たらしむるなり。

第二十四課　世界周遊　其五

倫敦ハ天下第一ノ大都會ニテ、人口三百餘萬アリ。市街ハ高厦大樓櫛比シ、富豪巨商甍ヲ竝ベ、電線ハ蛛網ノ如ク、瓦斯燈ハ滿街ニ耀キテ、夜猶ホ晝ノ如シ。鐵道ハ縱橫ニ通ジテ、其人馬雜沓ノ處ニ至リテハ、地中ニ隧道ヲ設ケテ汽車ヲ通ズルノミナラズ、河底ニモ亦鐵道ヲ通ズルニ至ル、誠ニ天下ノ奇巧ナリ。街衢清潔ニシテ、家屋橋梁宏壯ヲ極メ、百貨輻輳シ、通商貿易ノ盛ナルコト、宇內ニ其比ヲ見ズ。此國ハ、海軍ノ强盛ナルコト萬國ニ冠絕セリ。諸國通商ノ要路ニハ、堅固ナル城壘ヲ築キ、大ニ石炭兵粮ヲ貯ヘ、平時モ三四百萬ノ兵ヲ備フ。

英國對岸ノ國ニ和蘭佛蘭西獨逸アリ、獨逸ノ隣ニ魯西亞アリ。皆歐洲中ノ文明國ニテ、文學技藝夙ニ開ケ、交通貿易盛ニ行ハル。和蘭ハ國土頗ル小ナレドモ、早クヨリ東洋諸國ニ往來シ、殊ニ我ガ國ニ對シテハ、最モ古キ交際國ナリ。今日洋學ノ盛ナルハ、實ニ和蘭人其端ヲ開キシナリ。此國通商ノ盛ナルコト、今尙ホ昔日ニ異ナラズ。

佛蘭西ノ京城ヲ巴里ト曰フ。天下大都ノ一ナリ。諸子ハ嘗テ拿破翁ノ名ヲ聞キシコトアラン。此人古今ノ英傑ニテ匹夫ヨリ起リ佛蘭西ノ帝位ニ登リ四隣ヲ震慴セシメタルコト宛モ我ガ國ノ豐太閤ニ似タリ。然レドモ彼ハ一國ノ帝位ニ登リ此ハ一國ノ武權ヲ握リシナリ。抑西洋諸國ハ萬世一系ノ帝王アルコトナク英雄豪傑一タビ機運ニ乘ズレバ忽ニ帝王ト爲リ大統領ト爲ルコトヲ得ルナリ。之ヲ我ガ國ノ一天萬乘ノ至尊ヲ戴ク國民ニ比スレバ其差殊ニ甚ダシ。實ニ我ガ國ノ如ク皇統連綿トシテ天地ト與ニ窮リナキハ宇内ニ又アルコトナク盛ナリト謂フベシ。

獨逸ハ二十六邦同盟シテ組成セル國ナリ。中ニモ普魯士ハ歐洲强國ノ一ニテ京城ヲ伯林ト曰フ。兵卒ノ多クシテ精錬ナルト國民ノ鋭敏ナルト教育ノ善美ナルトハ最モ秀デタリ。現今我ガ國ノ兵制及ビ教育ハ模範ヲ此ニ取ルモノ多シト云フ。

魯西亞ハ境域ノ廣大ナルコト天下無比ナリ。

我ガ國ノ北端ナル樺太及ビかむちやつかモ皆其領地ナリ。魯西亞ノ大サヲ謂フトキハ、亞細亞ヲ三分シテ其一ヲ有チ歐羅巴ヲ二分シテ其一ヲ有テリ。故ニ其土地ノ廣サハ、全歐洲ニモ越エタリ。然レドモ本國ノ地及ビ亞細亞ノ領地ハ荒寒ノ原野多キガ故ニ、其利ハ却リテ大ナラズ。

「魯西亞ノ國都ヲ聖彼得堡ト曰フ。此國ニハ昔豪邁ノ帝王アリ、彼得大帝ト云ヘリ。大帝自ラ國土經營ノ策ヲ講シ萬世ノ家法ヲ子孫ニ貽セリ。家法トハ何ゾ。曰ク「四海ヲ混一シテ、魯帝ノ配下タラシメヨ」ト。故ニ今尚ホ氣運ノ到ルヲ待ツモノ、如シ。樺太ハ、元我ガ國ノ領地タリ、土地開ケズ、人烟稀疎ニシテ、魯人雜居ノ域タリシガ、毎歲兩國人ノ交渉煩ハシキヲ憂ヒ、明治八年我ガ國ヨリ之ヲ魯西亞ニ附シ、魯領ノ千島ヲ我ニ屬シ、以テ北方ノ境域ヲ明ニシタリ」

第二十五課　鐵ノ種類

鐵ハ、金屬中最モ要用ナルモノナリ。若シ此世界ニ鐵ナキトキハ、世ハ必ズ野蠻タルヲ免レザ

ルベシ。汽車汽船ノ便利モ鐵ニ非ザレバ其用ヲナスコト能ハズ。器具器械ノ裝置モ鐵ニアラザレバ成ルコト能ハズ。農夫モ鐵ナキトキハ耕耘スルコト能ハズ。工人モ鐵ナキトキハ建築スルコト能ハズ。其他彫刻ノ技藝ヨリ庖厨ノ料理ニ至ルマデ一トシテ鐵ノ用ヲ藉ラザルモノナシ。然レドモ上古蒙昧ノ世ハ鐵ノ用ヲ知ラザリキ。蓋シ鐵ハ天然純鑛トナリテ生ズルコトナク常ニ石ノ如キ朴鑛トナリテ產スルモノニシテ其內ヨリ純鐵ヲ得ルコトハ甚ダ容易ナラザルニ

由ルナリ。此ノ如キ時代ニ在リテハ人皆銅或ハ靑銅ノミヲ用ヒ尙ホ一層古代ニ於テハ石斧石刀等ヲ用ヒタリト云フ。

鐵鑛中最モ要用ナル者ハ酸化鐵ナリ。乃チ炭火ヲ以テ之ヲ灼ケバ其中ノ酸素離レ去リテ純鐵トナルベシ。之ヲ鍛鐵ト云フ。熱シテ赤色トナシ鍛ヘテ以テ釘鋤鍬及ビ車ノ輪等ヲ造ルニ意ノ如クナラズト云フコトナシ。又之ヲ擊チ延バセバ板トナスベク兩片ヲ熱シ合セテ鎚擊スレバ粘着シテ復タ離ルヽコトナシ。

又鑄鐵ト稱スルモノアリ。其要用ナルコト鍛鐵ニ亞グ。鎔解シテ模型ニ鑄入シ、以テ諸器物ヲ製作スベシ。鐵管、鐵柵及ビ鍋、釜ノ類ハ、皆此鐵ニテ造ルナリ。鑄鐵ノ性ハ、鍛鐵ニ異ナリ、熱シテ打チ延バスコト能ハズ、鎚ヲ以テ之ヲ打テバ、脆クシテ碎クルコト、恰モ玻璃ノ如シ。蓋シ鑄鐵ハ、純粹ノ鐵ニ非ズ、其中ニ幾多ノ炭素ヲ含有ス。故ニ法ヲ設ケテ炭素ヲ去レバ、變シテ鍛鐵トナスヲ得ベシ。

又鋼鐵ト名ヅクル一種ノ鐵アリ。剃刀、小刀、其他一切ノ利器ヲ造ルニ用フ。其性強クシテ且ツ堅ク、礪ギテ利及トナスヲ得ベシ。鋼鐵モ、亦少シク炭素ヲ含ムモノニシテ、之ヲ製スルニハ、鍛鐵若クハ鑄鐵ヲ以テス。鍛鐵ヲ以テスルトキハ、之ニ炭素ヲ加ヘ、鑄鐵ヲ以テスルトキハ、其炭素ノ幾分ヲ去ルナリ。

第二十六課　觀世太夫の傳

觀世太夫が木賊刈の能を、一人の農夫ありて、衆人の中にうちまじりて見しが、木賊刈の手ま

へをみて、觀世太夫は、いまだ木賊かる事を〜らずとつぶやきぬ。それを、觀世聞きつたへて、その農夫に、いかなる事と尋ねぬれば、農夫いふ、「されば、とよ、木賊を刈るは、鎌を逆手ににぎりてかるなり。艸などをかるが如くにしては、かれぬものなり」と答へけり。それより、觀世鎌を逆手ににぎりけりとなり。技藝といへども、名家となるものは、衆のそ〜りをいれて、其藝をみがくことなり。

畑鶴山……四方の硯

第二十七課　世界周遊　其六

倫敦ヲ發シ、西ニ向ヒテ大西洋ヲ進行スレバ、航程六日ニシテ北米合衆國ノ紐育ニ達ス。亞米利加洲ハ、稱シテ新世界ト云ヒ、亞細亞歐羅巴及ビ亞弗利加ノ三大洲ヲバ舊世界ト云フ。新世界トハ、此地ヲ發見セシハ、今ヨリ僅ニ四百年前ニ過ギザルコトナレバ、其以前ニハ、其有無ヲモ知ルモノナカリシ故ナリ。コレヲ發見セシハ、以太利ぜのあノ人閣龍トイフ者ナルガ、爾來歐人相踵ギテ渡航シ、盛ニ深林曠野ヲ開拓セシヨリ、千

古荒漠ノ地變シテ今日文明ノ域ニ化セリ。

紐育ハ交通貿易ノ要地ニテ、北米合衆國第一ノ都會トス。紐育ノ北ニぼすとんアリ、南ニひらでるひや及ビ華盛頓アリ。華盛頓ハ、合衆國初代ノ大統領華盛頓ノ建設セシ所ナリ。初メ此國ハ、英國ノ版圖ニ屬セシガ、今ヨリ百餘年前、華盛頓大元帥ト爲リテ獨立ノ軍ヲ起シ、血戰八年ニシテ、遂ニ英國ノ羈絆ヲ脫シ、北米合衆國ト稱シ、同盟共和ノ政府ヲ建テタリ。即チ合衆國トハ、現今三十八州ノ共和國ヲ謂フナリ。

桑港金門ノ圖

紐育ヨリ合衆國ヲ横截スル鐵道二條アリ。一ハ桑港ニ達シ、一ハばんくーばーニ達ス。各行程凡ソ四日ニテ通過シ得ベシ。途中ニハ茫々タル曠野アリ、洋々タル巨流アリ、峨々タル峻峰アリ。中ニモみしゝつぴ河ノ

如キハ、一千六百餘哩ノ長流ニシテ、世界第一ト稱ス。

桑港ヨリ我ガ國ノ横濱ニ到ルニハ、太平洋ヲ直航シ、行程二十日ヲ要ス。其海路ハ凡ソ四千四百哩ナリ。

世界周遊ノ行程ハ、凡ソ二萬四千哩ニシテ、四十三日ヲ要スルナリ。往年ハ、七十日ヲ費シテ世界ヲ周遊セシヲ、空前ノ事業ト稱讃シタレドモ、今ヤ航海鐵道ノ便日ニ月ニ進歩シ、僅々四十餘日ニテ周遊ヲ爲スコトヲ得ルハ、亦驚クベキ人事ノ發達ニアラズヤ。

第二十八課　忍耐

オーデュボンといひしは、米國の古き博物學者なり。此人は特に鳥類を研究せし人にて、自らゝ銃を携へて山野に獵し、獲たる鳥をば悉く寫生して、これを秘藏せり。かくてやゝ十五年の長き間に得たる鳥の寫生畫凡そ千餘枚に上りし頃、旅行すべき用事の出來せしかば、かの秘藏畫を、大なる箱に入れ、これを友人に託し置きて出立

せり。

友人は、預かりたる箱を、己が倉庫に藏めたるが、オーデュボンは、二三週間の後歸り來てこれを檢め見るに、こはいかに鼠其中に巢ぐひて、千餘枚の寫生畫は、爲めに破られ汚されて、一も全きものをかりき。

オーデュボンが悲みいかにぞや。これが爲め病氣にかゝり、久しく病床に呻吟して、生命も危きほどに至れり。されど、此熱心と忍耐との好き模範なる博物學者は、病全く癒ゆたる時、再び銃を肩にして山野を跋渉し、得たる鳥類をば、一々寫生し、畢生の力を盡して勉强せしかば、三年の間に、以前の如く千餘枚の寫生畫を、彼の箱に滿たすを得たりしとぞ。オーデュボンが如き熱心と忍耐こそ、何事を成すにも有りたきものなれ。

第二十九課　應擧が臥猪并野馬の話

圓山應擧に臥猪の畫を乞ふ者あり。應擧いまだ嘗て野猪の臥したるを見ず。こゝろにこれをもふ。矢背に老婆あり、薪を負うてつねに擧が

家に來る。應擧婆に問ふ。「爾野猪の臥したるを見たるか。婆云ふ。「山中たま〳〵これを視る。」擧云ふ、「爾かさねてこれを見ばはやくわれみしらせよ、篤く賞すべし。」婆諾す。一月ばかりありて、老婆が家のうしろなる竹篁中に野猪來りて臥す。婆これを見て大によろこび、京には〳〵り行きて、擧にこれを告ぐ。擧が云く。「爾まづかへれ、かならずしも驚かすべからず」といふて、俄頃に酒食を携へ、門人一兩輩を將て、矢背に至れば、野猪は猶竹篁中に臥したり。應擧すなはち筆を採りてこれを

うつ〳〵婆に謝〳〵て、その夜家にかへり、其後これを清畫〳〵て、工描既にとゝのふ。時に擧が家に鞍馬より來る老翁あり。この翁めづら〳〵く來りぬ。擧こゝろに臥猪の事をれもふ。すなはち問ふて云ふ。「汝野猪の臥〳〵たるを見たるか。」翁云ふ。「山中常にこれを見る。」擧畫するところの臥猪を〳〵めして云ふ。「この畫如何。」翁熟視することやゝ久〳〵くして云く。「この畫よ〳〵といへども、臥猪にあらず、是れ病猪なり。」といふ。擧れどろきてそのゆゑを問ふ。翁云く。「凡そ野猪の叢中に眠るや、毛髪憤

起四足屈蟠れのづからいきほひあり。僕山中にて病猪を見たることあり實にこの畫の如し。』學は〻めて曉りて翁に臥猪の形容を問ふ。翁之を說くことはなはだ詳なり。是に於て學さきの畫をすてゝ更に臥猪を圖す。工夫もつはら翁が口傳によれり。四五日ありて矢背の老婆來る。學さきに見たり〜野猪をとへば婆云く『あやしむべし彼の野猪その詰朝竹中に死たり』。學之を聞きて、いよ〳〵翁が卓見を感〻、ふたゝびそのれとづれをまつ。一旬ばかりを經て翁又來りぬ。學後

に圖するところの畫幅を披きて、これを見せ〜む。翁驚歎〜て云く『是れ眞の臥猪なり』と。學よろこびて厚く翁に謝す。その畫もつとも奇絕なり。今なほ京師某の家にあり。學が畫に心をもちゐしこと斯の如〜。又應學わかゝりし時野馬の草をはむところを圖せり。一老翁見て難〻て云く、『これ盲馬なり』。學云く『うのゆゑ甚麼』。翁云く『夫れ馬の草をくらはんとするや、必ず先づその目を閉づ。これ草に目を傷らんことを厭へばなり。この馬叢中に鼻づらをいれながらその兩眼をほ

見ひらきてあり、これ盲馬にあらず〜て何ぞや。」舉ふかくその說を感ず。抑この二翁何人ぞ。野夫にも巧者ありとは、これらをやいふべき。

瀧澤馬琴……曲亭漫筆

第三十課　締盟國

我ガ國ハ古來東洋ニ孤立シテ支那朝鮮及ビ和蘭ノ外ハ交際セズ。其他ノ國人ヲ視テハ總ベテ之ヲ野蠻ト爲シ彼等ガ國內ニ入リ國民ト交ルコトハ嚴禁シテ許サヾリキ。而ルニ今ヲ距ルコト三十餘年前ヨリ始メテ彼等ト交通シ修好及ビ通商條約ヲ結ブニ至レリ。

本邦ト初メテ和親條約ヲ結ビタルハ亞米利加合衆國ナリ。此條約ハ安政元年三月神奈川ニ於テ調印セリ。米國ニ次デ條約ヲ結ビタルハ英吉利露西亞和蘭佛蘭西獨逸等ナリ。英米佛獨蘭ノ五國ハ通商政治法律兵事文學教育ニ於テ各本邦ノ爲ニ進步ヲ資ケ利益ヲ與ヘタルコト少カラズ。

露西亞ハ世界ノ大國ニシテ列國ノ間ニ勢力

ヲ有シ殊ニ東洋ニ於テハ本邦ト隣國ノ好アリ。又支那及ビ朝鮮ト本邦ニ於ケル關係ハ決シテ他ノ外國ノ比ニアラズ。古來既ニ久シク相往來セシ舊交ハ深ク彼我人民ノ記憶ニ存スル所ナリ。其他ノ條約國ト本邦トノ交渉ハ未ダ大ニ進歩セズ。然レドモ將來ニ於テハ漸次ニ頻繁ナルベシ。

條約國ニハ本邦ヨリ公使若クハ領事ヲ派遣シテ各地ニ公館ヲ開ケリ。公使館ハ各國ノ首府ニ設ケ領事官ハ貿易隆盛ノ地ニ置ケリ。條約國モ亦各本邦ニ向テ公使領事等ヲ送リ公使館領事館ヲ東京横濱大阪神戸長崎等ニ開設セリ。

斯ノ如ク各國互ニ外交ヲ重ンシ條約ヲ結ビテ相交通スルハ何ゾヤ。彼我共ニ之ニ依リテ國利民福ヲ計ランガ爲メナリ。列國ノ間ニハ外ニ仁義ヲ飾リテ內ニ呑噬ノ政畧ヲ懷クモノアリ。故ニ本邦ハ之ニ對シテ常ニ警戒ヲ加ヘ武ヲ錬リ兵ヲ養ハザル可カラズト雖モ專ラ平和ノ交際ヲ旨トシ務メテ戰爭ノ禍害ヲ避ケザル可カラズ。平和ノ交際ヨリ生ズベキ內外ノ利益ハ最

モ廣大ニシテ戰爭ノ爲ニ起ルベキ禍害ハ極メテ慘烈ナレバナリ。

平和ノ交際ハ信義ヲ重ンシ恭敬ヲ盡スニ在リ。故ニ我ガ國民ノ外國人ニ對スルニハ決シテ詐僞無禮等ノ行アル可カラズ。

高等讀本卷之四　終

版權所有

高等讀本　全八冊

代表　四日之丿

卷一ニ　明治三十六年二月十五日印刷　同年二月二十五日發行
卷三五六　明治三十六年六月二日印刷　同年六月五日發行
卷七八一　明治三十六年十二月十二日訂正再版　同年十二月十五日發行
卷四　明治三十七年五月廿七日訂正再版印刷　同年同月廿七日發行

著作者　山縣悌三郎
東京市下谷區金杉上根岸村千九拾番地

發行者
印刷人　小林義則
東京市日本橋區小伝馬町四丁目十六番地

發賣　文學社
東京市日本橋區本町四丁目十二番地

印刷所　文學社工場
東京市神田區錦町三丁目十二番地